

## 第75回新潟消化器病研究会

日時 平成14年2月16日(土)  
午後1時～  
会場 新潟ユニゾンプラザ  
大研修室

### I. 一般演題

#### 1 食道癌における胃癌重複例の検討

山田 明・阿部 要一・齊藤 文良  
湯口 卓・佐藤 秀一\*・鈴木 康史\*  
新潟医療生活協同組合・木戸病院外科  
同 内科\*

過去7年間の食道癌74例における食道多重癌19例(25.7%)のうち、最も頻度の多い胃癌重複の9例を検討した。食道多重癌では胃癌の頻度が高い(12.2%)こと、胃癌に重複した食道癌は表在癌が多いこと(88.9%)、胃癌の重複は同時性(88.9%)で、早期癌(88.9%)である頻度が非常に高く、また多発早期癌(44.4%)の頻度も高いこと、さらに食道癌手術例において早期胃癌の2病巣が見逃されていたことより、上部内視鏡検査を行うにあたり、食道癌症例には常に胃癌しかも多発早期胃癌の存在を念頭におくこと、また胃癌症例には食道表在癌を発見すべく慎重に食道観察を行うこと、手術後には異時性の食道、胃の多発癌の発生を考慮した長期の経過観察が重要であると思われた。

#### 2 食道癌術後の再建胃管癌に対して内視鏡的粘膜切除を施行した1例

清水 英利・宮下 薫・山口 和也  
轟木 秀一・藍澤喜久雄

燕労災病院外科

食道癌に対する治療成績の向上により術後長期生存例が増加してきたことに伴い、再建胃管癌症例の報告が増加してきている。

今回当科にて食道癌術後に発生した再建胃管癌をEMRで切除し得た症例を経験したので報告する。

症例は79歳女性。72歳時に食道癌に対し食道亜全摘術施行し、胸骨後経路胃管で再建した。7年後、スクリーニングで行った内視鏡検査で再建胃管に早期胃癌を認め、EMRを施行した。病理所見はtub1, mであった。1年9ヶ月経過した現在も再発の兆候なく、生存中である。

胃管癌の手術は侵襲が大きく操作も困難なため、早期の発見は重要であり、そのための定期的な内視鏡検査は必要不可欠である。食道癌術後は胃管癌の発生も念頭におき、内視鏡検査で経過観察していくことが必要と考えられる。

#### 3 多発性骨転移を来した表層拡大型胃印環細胞癌の1例

相場 恒男・何 汝朝・月岡 恵  
畑 耕治郎・五十嵐健太郎・古川 浩一  
阿部 行宏・関 利明\*・宮島 衛\*\*  
新潟市民病院消化器科  
同 整形外科\*  
同 救命救急センター\*\*

我々は、多発性骨転移で発見された表層拡大型胃癌の1例を経験したので報告する。症例は67歳男性。以前鋳物師で塵肺と認定。平成11年頃から腰痛を自覚。13年5月から腰痛が増強し、6月4日当院整形外科入院。骨シンチ等で多発性骨転移と診断。DICも合併。L4からの骨生検で印環細胞癌を検出し、8月6日当科転科。検査所見で、Hb, Pltの減少, ALP高値, FDP高値あり。胃透視で、所見は認めなかったが、上部内視鏡で、体下～体中部小弯に、粘膜粗造があり、生検にてGroup V, 低分化腺癌、一部印環細胞癌を検出。境界は不明瞭。転科約1月半後の9月26日永眠。剖検の結果、両側末梢肺動脈に腫瘍塞栓が多発。剖検所見で、胃体部～噴門の前壁、小弯にかけ、広汎に癌の拡がりを認め、8×7.5cmに及び、深達度はSM2だった。組織型はpor1, tub2, sig～por2であった。本例につき文献的考察を加え、報告する。